

【後編】

〈歴史家の眼〉

スクリーンにありますのは系図です。イングランドは、中世にフランスとの百年戦争に結局負けて帰ってくるわけですが、続いてイングランドの有力貴族の間で内戦が何十年も続いてしまう。赤薔薇をシンボルにしたランカスター家と、白薔薇をシンボルにしたヨーク家との争いというので、薔薇戦争というあだ名が19世紀になってから付けられるわけです。貴族の間の内戦です。それを治めたのは、ヘンリ7世でして、ヘンリ7世と言っても、イングランドの国王の名前で、ヘンリっていうのがとても人気があって、そのうちの前の方から数えて7人目だから7世です。ヘンリ6世の子供とか、そういうことではありません。

そのヘンリ7世が、赤薔薇のランカスター家ですけども、長年の敵であるヨーク家のエリザベス姫と結婚して、テューダ家を作る。赤薔薇と白薔薇を合体させた紋章でもって和平のシンボルとするという形で、テューダ朝を始めるわけです。このヘンリ7世自体はそんなに有名じゃないと思いますが、みなさん、この人はよくご存知ですよ、ヘンリ8世。先程の系図でも、「＝」の印は正式に結婚した場合の婚姻関係を示すわけで、ヘンリ8世は6回結婚しましたので、6人の奥さんがいますね。名前は書かずに「＝」を6つ出しましたが、男性的な、すごいエネルギーな男、ガニ股の王様として描かれています。アップにしますと、体の真ん中の男性性をこんなにも強調した絵ですね、恥ずかしげもなく描きます。それから、この時代、脚を見せるのは男性だけです。女の人が脚を見せたら、それは即売春婦ってことになってしまいますから、まともな女性は、長いスカートでくるぶしまで隠しています。男性に限って脚線美を見せたり、体の真ん中のこのようなものを見せたり。それからすごいお洒落ですね、この毛皮とかは、カナダや北極圏から来ますから、今では信じられないほどの高価なものを身に付けています。

そのヘンリ8世が目をつけた女性が、このアン・ブーリン、アンナ・ボリーナと書いてありますが、赤い薔薇を持っておりますね、“B”というイニシャルをつけています。みなさんはこの肖像を見て、わあ、綺麗と思うのかどうか。実はヘンリ8世が好きな女性のタイプというのは、何と言っても頭の良い女性、話が面白い女性、一緒にいて目が輝いてくる女性、それからフランス語とか、音楽の話ができるとか、エラスムスのことはわかっているというような人なんですね。そういうお眼鏡にアン・ブーリンは叶いました。フランスの宮廷で嫁入り修業していたこともあって、フランス語ができるだけではなくて、フランス的な愛のマナーとかそういうことも身につけていたようです。表面的な美人とかでは無しに、「目が輝いている、頭のいい女性」にヘンリ8世は心動かされたようですよ。

2人の間に生まれた可愛い姫がこの人、後のエリザベス女王ですね。エリザベス女王は、容姿のうちでも一番自信を持っていたというか、人に見て欲しかったのは手です。この白魚のような指を見てほしいわけですね。聖書を持っていますけれども、敬虔なプロテスタントとして、いろんなところ見て欲しいけれども、まずは手ということですね。これはお婆ちゃんになるまで同じです。

エリザベス女王で一番有名なのは、この絵ですね。アルマダ海戦でもってスペインと覇を競うわけですけども、すごい宝石をいっぱい身に纏っています。左がイングランドの海軍の船、右は敵のスペインの船、正しいイングランドのプロテスタントの国に侵略しようという悪魔の企て、そんなことを企ててしまったスペインの船は、神罰の嵐で沈没してしまったのだ。絵の中の絵でもって彼女の偉業を称える。そうして、強いスペインの海上覇権を凌駕して、イングランドの海軍が世界に進出していくという

ことで、地球儀があります。世界といっても、特に、カリブ海、西インドを指差していますね、そこが、このときのイングランドにとってとても重要だったことが表されています。

〈メアリ女王の子ジェイムズ〉

イングランドは、白地に赤い十字の王国でした。それに対して、スコットランドは、今スコットランドが独立するかどうかということで、住民投票、国民投票が行われたりしていますけれども、これも独立の王国でありました。そのスコットランドでは、エリザベス女王とちょうど同じ時期に、メアリという女王がいました。この人、スチュアート朝のメアリは、生まれが 1542 年ですけども、生まれて一週間もしないうちに女王になりました。つまり父親が亡くなって、男の兄弟も全員自分より先に死んでいたから 0 歳でスコットランド女王になったわけです。彼女のお母さんは、マリ・ド・ギーズといって、フランスのカトリックの大立者のギーズ家の人です。熱烈なカトリックとして育てられました。スコットランド女王としては、お母さんが摂政をしているわけですが、女王自身は、いろんな人から求愛されますけども、結局、結婚したのはフランスの王太子ですね。系図でメアリ女王をピンクにしましたが、ちょうど今、NHK テレビで「クイーン・メアリ」やっていますね。水曜日の夜、今晚の 11 時 15 分からですか、もう第 3 回のようなのですが、愛に生きる女として描くのはいいのですが、なかなかこの人は嫌な女であるし、女王として、こんなにも無能であるという面は目をつむってただの恋愛ドラマに仕立て上げるので、とても歴史家としては認められないドラマです。時代考証がなっていない。

そのメアリの最初の結婚は、フランスの王太子、つまり次に国王になることが約束されていたフランソワですが、1558 年に結婚して、翌年にその父親が亡くなったので、フランス王のフランソワ 2 世になりました。メアリ妃は 16 歳で、年下の 14 歳のフランソワ王子は病弱で、王になって 1 年で命絶えてしまうんですね。フランスにおける結婚生活は幸せでなかったと思われます。

それで、政情不安のパリにいてもしょうがないですから、スコットランドに帰国しました。帰国してみたら、ノックスというカルヴァン派の宗教改革の運動家が力を持っておりまして、都のエディンバラは改革派が多数派です。とても居心地が悪いです。しかもスコットランド貴族は、今に至るまでそれぞれのクラン（氏族）ごとに対立していて、服装までクランによって違うわけです。この当時は尚更でして、その政争に巻き込まれてしまうんですが、こういう美しい女性ですから、いろんな男が言い寄ってくるんですね。その中で、ダーンリ卿と結婚します。絵の左が 2 番目の夫のダーンリ卿、右がクイーン・メアリですね。結婚してすぐ妊娠しました。妊娠していたんだけど、女王はイタリアから来たちよいつワル親父のリッツィオという男と恋愛関係に入ります。怒った夫ダーンリおよびその他の貴族たちが、リッツィオと彼女がいるところに乱入して殺します。女王メアリは、自分の目の前で愛人リッツィオが殺害されるということになります。それが 1566 年ですね。無事ジェイムズを出産し、その後すぐに、ボスウェルという伯爵と出会い、1567 年に夫ダーンリの暗殺を実行し、ボスウェルと再婚します。3 番目の夫です。この人、伯爵だったんですが、それを公爵に格上げしますが、そのことを他のスコットランド貴族たちは快く思っていない。女王陛下もその夫オークニ公も、政治的に追放されます。メアリは王たるに相応しくないということで、廃位され、軟禁されます。廃位した後どうなるかというと、彼女が産んだばかりの、まだ 1 歳にならない誕生日前のジェイムズが王位継承して、ジェイムズ 6 世になったわけです。1567 年の間に、2 番目の夫ダーンリ卿の暗殺、そして 3 番目のボスウェル伯との再婚、夫妻の追放、廃位、軟禁まで立て続けに起こる。そして夫ボスウェルはスコットランドの北の方の島々を

經由してノルウェーまで逃れ、デンマークへ逃亡して、野垂れ死にします。

系図に戻りますが、メアリとダーンリとの間に生まれた子ジェイムズ、1566年に生まれて1567年に自分の母親が廃位されるわけですから、1歳になる年にジェイムズ6世になったわけです。このジェイムズの周りの人たち、取り巻きたちは、皆プロテスタントの優秀な人たちで、赤ん坊のジェイムズが、母親メアリみたいにならないように、きちんとしたプロテスタントの人文教育をします。スコットランドで一番優れたような家庭教師たちが、寄ってたかって彼を立派な青年に育てる。それから、隣の国のエリザベス1世とは文通が続いていまして、ジェイムズとエリザベスの間に信頼関係が成り立っているんですが、そうしたことを知って、メアリは、軟禁されてるんですけども熱心なカトリックですから、エリザベスの暗殺を企てます。処刑されてもいいところを、軟禁されているのに、プロテスタントのエリザベスを暗殺しようという国際的な陰謀に加わった。その証拠が上がってしまって、1587年に彼女は処刑されることになります。ジェイムズ6世は、1586年に信頼関係のあったエリザベスと契約して、エリザベスは自分が亡くなった後のイングランド王位継承者は、頭のいいあなたである、プロテスタントでもある。ということを確認して、それを周知します。それで、翌年メアリは、エリザベス暗殺計画、実は2度目の暗殺計画が漏れて処刑されました。

その絵がここにあります。斧でメアリの首と体は引き離されて、なおかつ次の瞬間も描いてあります。メアリの遺品が、カトリックとして大事なもので、ありがたいものとしてみんなが崇拝すると困るので、メアリが着ていた衣服を燃してしまいました。1587年の話です。

自分の親の処刑を命じたエリザベス女王のことを、スコットランド王である若きジェイムズ6世は、尊敬し続けています。翌1588年に、このメアリ処刑を理由に、スペインのフェリペ2世が無敵艦隊を寄越したわけですが、それに対し、神風が吹いてイングランドが勝ってよかったと思っているわけですね。1589年にノルウェーに旅行をして、デンマーク王女のアンと結婚することになります。

ジェイムズの立場に立ちますと、自分の母が女王で、綺麗だということもありますが、フランソワ2世と死別し、ダーンリ卿と結婚して自分を産んだわけですが、そのときも、愛人と何かしてるところをみんなに襲われる。また、ボスウェルと親密になって、このボスウェルと母が、自分の父ダーンリの殺害に関与していたということは、成人してから、状況証拠しかありませんけども、信じざるを得ないわけですね。そういうジェイムズ王は、普通イギリス史で、ホモセクシャルだったと非難がましく書いてあります。けれども、ジェイムズの立場に立ってごらんください。自分の母親が、綺麗かもしれないけども、次々に男性を替えて、自分の父親殺しにまで関与してしまう。女とは、ハムレットは「か弱きもの」という言い方をしますが、恐ろしい存在なわけですし、なかなか異性に対して愛情を持つことはできなかったわけです。家庭教師とか、いろんな周りの人たちから、王たることの第一の義務は、善政を行うよりも何よりも、最優先課題は元気な子供を産むことであると、つまり結婚することであると言い聞かされていたので、ノルウェーで知り合ったデンマーク王女は、たった15歳ですけども、その人と結婚することになったんですね。

最初のうちの結婚生活が幸せだったかは、よくわかりません。その間、著作をどんどん書きます。「悪魔学」「自由君主の真の法」とか、「バジリコン ドロン」、ドロンとは化けるんじゃないくてラテン語の本です。そういったものを書いて、自分はいかに優秀な学者であるか、ヨーロッパで一流の学者という自己のアイデンティティーみたいなものを主張したかったわけですね。肖像画でも左手に地球を持って、地球全体で考えてみても私は、ペンでもって立派な著作を書くことができる大学者である、という自負

心の表れのような自画像ですね。

そして 1603 年にエリザベス 1 世が寿命で亡くなりましたから、契約の通り、彼がイングランド王として迎えられますが、でも、スコットランド王のジェイムズ 6 世を辞めるわけではありません。別の国としてあるスコットランドの王ジェイムズ 6 世が、イングランド王国の国王ジェイムズ 1 世になった。普通、同君連合といいますが、最近の歴史学では「複合君主制」ですけど、それぞれの国の君主として君臨することになるわけですね。そして、これがポイントですが、その直前直後に『ハムレット』っていう演劇がロンドンで上演され評判になるのです。

ジェイムズがロンドンに行幸して凱旋行進をするのは、その年の 5 月です。歓迎式典がいろいろロンドンで行われます。ロンドンに来ていろんなことを行いました。そのうち、よく知られているジェイムズ王の最も知的な重要な仕事は、「欽定訳聖書」、キング・ジェイムズ・バージョンを作って、これがかなり最近まで、イギリスやアメリカだけじゃない、オーストラリアやインドだけじゃない、国教徒であれ、非国教徒であれ、英語で聖書を読む人たちはこれによるという決定版を完成させた国王として記憶されます。

〈16 世紀の世話物演劇『ハムレット』〉

『ハムレット』という劇が初めて演じられた 1600 年ころには、スコットランド王だったジェイムズが、もう次のイングランド王になることをみんなが知っている状態です。そして、その母は、綺麗だったかもしれないけども、恋愛遊戯を繰り返すような人で、最後は愛の逃避行する。その逃避行で「この人と一緒だったら世の果てまで行くわ」と言った女性です。メアリの立場に立てば、ようやく自分を成熟した女として十分に愛してくれるボスウェルという男と出会ったわけですから、国がどうだ、外交がどうだといった問題などよりも、愛に生きるということを選んだんでしょね。そういうメアリやボスウェルをスコットランドの人たちは追放して、女王に相応しくないというので幽閉した。幽閉されている身でも、隣の国のエリザベス女王暗殺計画を立てるような、そういう人なんですね。歴史ドラマとしてはどうでしょうか。

そこで、エルシノール、ハムレット劇の舞台です。エルシノール城は現在の名前で言うとクロンボー城ですが、ズント海峡の要衝にあります。ここの税関の記録は歴史資料として、限りなく重要なものでして、近世ヨーロッパ経済史の最重要資料の 1 つです。一世を風靡しました大塚久雄さんの歴史学を批判するときにこれが使われます。このズント海峡の資料を使って、立派な修士論文を書いて今イギリスに留学している院生もおります。

ズント海峡の記録を元にして、有名なウォーラステイン、アメリカの社会学者ですけども、世界経済史に目覚めて「世界システム論」を展開することになりますが、彼の論拠の 1 つはバルト海貿易です。その盛衰を何百年の単位でもって跡付けるには、ズント海峡の税関記録が使えるんですね。そういう最近の歴史学の大転換にあたっても、エルシノール城、クロンボー城は重要です。

それから、『ハムレット』劇で、最初から最後まで立ち会う証人として、重要な役割をしますホレイショは、ヴィッテンベルク大学における学友ですけども、先ほど申した通り、ルターの宗教改革の舞台です。ヴィッテンベルク大学は、実は新しく 1502 年にできたばかり。ルターが 1517 年に、95 箇条の論題を貼り付けたときは、ウィッテンベルク大学の教授ですけども、まだできて 15 年目の新設大学だったんですね。デンマーク王家はプロテスタントですので、そこから王子がルターの大学に留学するのは極

めてナチュラルなことです、16 世紀のチャージされた経済・宗教・政治事情が、『ハムレット』にはもろに出ています。

そして次に、フォーティンブラスの父が、やはり同じ名前のフォーティンブラスですけども、先の王ハムレットに敗れまして、領土を没収されております。その同姓同名の王子フォーティンブラスが、軍人として勇壮果敢であるというふうに、劇の中で言われています。バルト海沿岸のポーランドで戦争に勝った挙句、帰ってくる途中に城に寄ったら、たまたまその時に全員が死ぬような惨劇が終わったところだった、ということなんです。王子フォーティンブラスにとっては、自分の父ノルウェー王が、デンマーク王に領土を没収された意趣返しのような意味があるというふうに普通は解釈して、そこで止まっていますが、歴史学者はそこで止まてはいけません。

実はこの時期、デンマークとノルウェーはひとつの国です。特に 1524 年から 1814 年まで、ナポレオン戦争後のウィーン会議まで、デンマーク＝ノルウェー王国はひとつの君主制、複合君主制なんです、そのうちの前半、1524 年から 1660 年までは選挙王政です。というのは、国王を選挙で選ぶんですね、貴族たちが選挙して、この人がいい。人格者だ。政治的に有能だ。いろいろ諍いがあってもうまく治めてくれるとかいったことで選ぶ、“election”で決まる。この『ハムレット』劇で、何度かハムレットは“election”という言葉を目にします。その日本語訳を見ますと、「選ばれる」とかいうふうにちょっと誤魔化して訳していたりしますが、選挙をするということです。「投票する」という言葉も使っていますが、つまりハムレットの最後の遺言として、フォーティンブラスに向かって、「次の国王を決める選挙では、君に投票する」と言明して息絶える。

〈近世の諸国家システム〉

極めて非文学的かもしれませんが、この時代は、前から申し上げます通り、生き馬の目を抜く国と国との生存競争の時代です、王位継承はとても厳しい。「諸国家システム」と言いますか、ようするに、国がヨーロッパ中にたくさん、300 くらいあって、それぞれが、ちょっと違いますが、戦国時代の日本みたいなものですね。駿河の国、相模の国、合計 300 以上ありましたけども、それが天下統一して、誰が天下人になるかということで、応仁の乱から秀吉ないしは家康の時代まで 100 年、それ以上の間、国盗り物語が続くわけです。ヨーロッパがそういう戦国時代的な状況にあったという言い方をしてもいいかもしれません。イギリスと私たちが呼んでいるブリテン諸島においては、スコットランド王国、イングランド王国、アイルランド王国という 3 つの王国がありましたが、ジェームズは、その 3 つの王国を統一する君主になるわけですね。スカンジナビアではご覧にいらしている通り、デンマーク王国、ノルウェー王国、スウェーデン王国が合従連衡しています。フランスという国は、1 つの国として高校世界史では教えられていますが、実はナヴァール王国とフランス王国と 2 つが合体しているのですが、宗教をめぐるユグノー戦争が続いている。ネーデルラント、現在のオランダでは 7 つの州が、スペインのカトリックの支配から逃れたいということで、独立戦争中ですね。1609 年に独立戦争は終わりますが、やがてまた「三十年戦争」で再びヨーロッパが宗教と世俗の大戦争にまみれることになります。

日本史では、戦国時代でキリシタンと鉄砲が渡来して、いろんなことがあって、ちょうど「真田丸」の時代ですね。豊臣で統一したかと思ったらそれがまたひっくり返って、タヌキ親父の統一政権になるんだという結論は、みなさんご存じですけども、よくご存知のドラマが、それなりの視聴率を稼いでいますね。ヨーロッパではちょうどルターの宗教改革あたりから、フェリペ 2 世、エリザベス女王、そ

れからこのジェイムズ 6 世、1 世の時代です。スペインやポルトガルが 16 世紀の間には世界の覇権を握っていたけども、やがてオランダがアジアにどんどん進出してくる。

いわゆる鎖国、日本が徳川政権のもとで国交と通商を統制するにあたって、「なんでオランダだけが西洋の国として貿易を許されることになったのか」という問題ですけども、これは中学高校で習うときには、オランダはプロテスタントで日本の宗教的な支配を狙っていないからと言う説明ですが、それでは説明がつかないですね。何故かという、イギリスもデンマークもプロテスタントで、アジア進出をしていたわけです。なんでオランダかというのは、たまたま、いわゆる鎖国で通商を管理する体制を取る 1630 年代に、西洋の商業覇権を握っていたのはオランダだったから。だから、そのオランダとの貿易をしないという選択肢はあり得なかった、ということまで日本史では教えないといけない。フランス、イギリス、デンマークも東インド会社を設立して、いろんなことをやっていました。

スクリーンのこの人、あまり見たことないですね。20 世紀の終わりに建てられた像ですか。「日本初洋式帆船建造の地」とあって、ウィリアム・アダムスですね。海の男三浦按針。徳川家康にとっても気に入られたイギリス人です。帆船、洋式の船も作った。伊豆の伊東で作ったものですから、そこにこの碑があります。按針が長生きしていれば、そして家康ももっと長生きしてれば、イギリスの商業覇権がもうちょっと日本で展開し、だから長崎の出島にいるのはオランダ人じゃなくて、エゲレス人っていう可能性も無いではなかった。そういうパーソナルなこととは別に、オランダの商業力が勝ってしまった。この家康は、申し上げている通り、シェイクスピアが亡くなったと同じ 1616 年に亡くなるわけですね。三浦按針、ウィリアム・アダムスは、もうちょっと後まで生きていますけども、奇しくも生まれた年は 1564 年、シェイクスピアと同一年です。そういう互いに関係する“connected”という英語が最近流行りですけど、そういうことになっているんですね。

結論に入っていきます。“The Tragical History of HAMLET, Prince of Denmark”というお話ですけども、最初に申し上げた通り、本になったのは 1603 年ですけども、1600 年ちょうどくらいからロンドンで上演されて、人気の演劇でした。近世という時代はいろんなことが多義的で、1 つのことでもいろんな意味があり、言葉遊び、寓意もさかんです。シェイクスピア自身も“words, words, words”という台詞をハムレットに言わせていますけれども、そういう「時代物の演劇」として、この『ハムレット』が人気を博したわけですね。

1600 年前後、特に 1603 年にジェイムズ王がイングランド王位を継承して、1604 年に初議会が召集されるわけですが、その時のロンドンの聴衆、あるいは読者たちは、『ハムレット』を、普通の悲劇以上のたくさんのことを連想させる作品として受け止めました。すなわちヨーロッパ事情、ときの 16 世紀のバルト貿易にとって枢要なデンマーク＝ノルウェーの王政がどうなっている。実は、スコットランドの王がイングランド王としてやってくるけども、そのジェイムズ王の母は、あの恋多きメアリ女王、その父は暗殺された、と周知の事実です。そして同君連合、複合君主制は何もイギリスだけの特別なことじゃなくて、ヨーロッパ中で他にもあるんだ。ここでは申しませんでしたが、ポーランドもそうですし、しかもポーランド、デンマークですと、選挙をやって王を選んだりする。そういう選挙王政に比べると、まだ血筋を大事にしているイングランド、ないはスコットランドの方が安心できるかなと、この時代の人々が思ったか思わないかということも含めまして、いろんな意味が込められた作品です。すなわちスキャンダルも含めて「悲劇的な史劇」であるし、「歴史的な悲劇」である。そうしたものとして、当時の人たちは受け止めて評判になったと推定されます。それを歴史的に、バチッと、ほらこのようにと証明す

る手紙とか史料を今提示できたわけでありませんが、かなり十分な根拠をもって、そう推定されます。

以上、ちょっと理屈っぽい話になりましたけども、今日のお話は以上にしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。